HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	メーチニコフの革命思想におけるナショナルな契機
Author(s)	渡辺, 雅司; Watanabe, Masaji
Citation	スラヴ研究, 31, 19-43
Issue Date	1984
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5138
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113228.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

メーチニコフの革命思想におけるナショナルな契機

渡　辺　雅　司

1.

アレクセイ・ミハイロヴィチの治世もおわろうとしていた1675年のこと，モスクワ政府派遣の中国使節として北京に滞在中のニコライ・スパファリイは，報告書にこうしたためた。「支那帝国の東方はるか700露里の海上に，いと大なる島嶼あり。その名をイアポーニアという」[1]

その姓からもわかるように，このスパファリイなる人物は，元来ロシア人ではない。かつて王位の簒奪をもくろみ，それが未然に発覚したため，一族ともども祖国を捨て，ロシアに亡命したモルダビアの大貴族であった。勇猛果敢にして，かつ8カ国語をよくしたという彼は，モスクワ政府の重用するところとなり，その語学力を買われて中国使節に抜擢されたのだった。彼は本名をニコライ・ミレスクといい，スパファリイとはルーマニア語で"太刀持"，つまり彼に与えられた称号である。

それから200年。1874年（明治7年）の春，印度洋まわりのフランス郵船"ヴォルガ"で横浜にやってきた一人のロシア人があった。彼の名はレフ・イリイッチ・メーチニコフ(1838-1888)，その前年に開設されたばかりの東京外国語学校魯語科の初代主任教授になる人物である。そして彼こそはロシア人には珍しいその姓（メーチニコフとは"太刀持"，日本名ならさしずめ"剣持"となろう）が示すとおり，かのニコライ・ミレスクの直系の子孫であった。

少年時代に父祖の恥辱をはらすため単身モルダビアへむかったというエピソードが語るように，メーチニコフ自身もこうした自分の出自を知ってはいた[2]。だがよもやそのニコライ・ミレスクが200年も前に，これから自分が暮すことになる極東の島国に思いを馳せていたなどとは知るよしもなかった。

不幸にしてわずか一年半で日本を去らねばならなかったが，日本へ寄せるメーチニコフの思いは，浩瀚な著書『日本帝国』[3]（1881）や，日本の近代化の歴史的必然性を鋭く洞察した「明治維新論」[4]をはじめとする大小20点あまりの著作となって結実する[5]。

---

1) К. С. Карташева „Дороги Льва Мечникова", Москва, 1981, стр. 22.

2) カルターシェワの前掲書によると，メーチニコフは一族の出自について叔父のドミートリイから聞かされたことになっている。Там же, стр. 7. またメーチニコフの末弟イリヤ・イリイッチ（1845-1916，ノーベル賞を受賞した細菌学者）の伝記の著者レズニクによると，アレクセイ・ミハイロヴィチに寵愛されたスパファリイは，その学識を買われて幼少時代のピョートル大帝の教師役をつとめたいう。Семен Резник „Мечников", Москва, 1973, стр. 21.

3) Léon Metchnikoff. *L'émpire Japonais*, Genève 1881. イタリアの東洋学者トゥレッチニが編集する《あつめ草》出版所から出版されたこの書は700ページにおよぶ膨大なもので，そこにはかつて画家を志したメーチニコフ自筆の日本画風の挿絵が多数収録されている。

4) Лев Мечников „Эра просвещения Японии", 《Дело》 1876, No. 10, „Эра японского просвещения", 《Дело》, 1877, No. 2, なおこの二つの論文を一冊にまとめたのが，拙訳『亡命ロシア

ジュネーブで大山巌と劇的に出会う以前にすでに日本語を習得し，欧米で入手できる日本関係の文献をすべて読破していた[6]ことに加え，地理学者，民俗学者として早くからアジアに多大なる学問的関心を寄せていたことと，亡命革命家としての豊富な実践的経験が日本文明の特質を鋭く抉り出すような卓抜な視点を彼に与えたのであろう。

ところで日本とはこれほど縁の深いメーチニコフであるが，ロシアでは彼はほとんど忘れられた思想家といっていい[7]。だが無名だからといってマイナーな思想家だということにはかならずしもならない。歴史における忘却とは，さまざまな要因によって起るものであり，そこには往々にして研究状況の立遅れと，方法論の一面性が反映していることを見逃してはならない。少なくともメーチニコフについてはこのことがもっとも当てはまる。

彼自身，自伝的小説を「世界を股に」(„На всемирном поприще") と題するように，その足跡はまさしく世界各地におよんでいる。不自由な足をひきずりながら，彼はヨーロッパ諸国はもとより，中東，バルカン諸国，アフリカ，極東，アメリカへと足をのばしてい

人の見た明治維新』，1982年，講談社学術文庫，である。

5) 日本に関するメーチニコフの著作を以下に列記する。①„ Воспоминания о двухлетней службе в Японии" 《Русские Ведомости》, 1883-1884. (14回連載)

②„Европейское образование в Японии", 《Русские Ведомости》, 1885, No. 92.

③„L'empire des Tennos", *Revue de géographie*. ed. par Drapeyron, Vol. II, pp. 15-23, 81-99, 189-205. Paris, 1877.

④„L'empire Japonais. Le pays, le peuple, l'histoire et actualités," 1878-81, *Atsume Gusa*, Vols. V-VII.

⑤„Les villes du Japon". *Revue de géographie* Vol. V, p. 283, 1879.

⑥„La litterature russe sur le Japon", *Mémoires de la société des études jap. etc.* Vol. I, pp. 25-30, Paris, 1873.

⑦„Extréme Orient", *Recueil de linguistique, d'ethonographie et d'histoire*, dirigé par Turrettini et Metchnikoff Vol. I, genéve, 1877.

⑧„Bréviaire de la religion sinto [ou kami], Sanscrit text in Roman characters, introduction, French translation and a commentary by L. Metchnikoff." *Ban Zai Sau*, Vol. IV, Genève, 1880.

⑨„Etude sur la religion national des Japonais., le culte des Kamis ou Shintoisme", *3° Congrés provincial des Orientalistes à Lyon en 1878*, Vol. II, pp. 92-101, 1880.

⑩„Le caractères anciens écriture Hifoumi, Ana-itsi et Hatuma au Japon". *Compte rendu du la IIIe session du Congrés provincial des Orintalistes à Lyon en 1878*, 1878, Vol. II, pp. 134-140, 1880.

⑪„Une dynastie archaïque du Japon", *Mémoires de la Société des études jap. etc.*, Vol, V, pp. 5-22, Paris, 1886.

⑫„Die neuen administrativen Eintheilungen Japan's." *Petermann's geographische Mitteil*, Vol. 22, pp. 401-404, Gotha, 1876.

⑬„Des origines japonaises", *Bulletin de la Société d'anthropologie*, 3rd ser. Vol. IV. pp. 724-737, Paris, 1881.

⑭„Contributions à la connaissance geologique du Japon." *Compte rendu des séances de l'Académie des Sciences*, Vol. 94, pp. 146-147, Paris, 1882.

⑮„Les Ainos" *Compte rendu de la IIIe session du Congrés provincial des Oriental. à Lyon en 1878*, Vol. I, pp. 217-222, 1880.

⑯"Vocabulaire japonais-aino-coréen", *Ban Zai Sau*, Vol. IV. sheets 157-158, Genève, 1880. Tr, from Poutzilo's „Essai de dictionnaire russe-coréen", St. Petersburg, 1874.

⑰„Ballade aino", *Ban Zai Sau*, Vol. IV, sheets, 150, and 176, 1880.

6) 拙訳『亡命ロシア人の見た明治維新』，90-91ページ参照。

7) Н. Лебедев. Вступительная статья к книге 《Цивилизация и великие исторические реки》, М., 1924. стр. 3.

るのである。わずか100年前のこととはいえ，こうした彼の足跡を追うことは容易ではない。しかも1859年以来，生涯を亡命者として生きたため，彼にかんする資料は母国ソビエトのアルヒーフにもさほど残ってはいないようだ[8]。

第二に亡命生活と関連するが，メーチニコフには400点近い(推定)著書，論文があるにもかかわらず，その大半が匿名ないし十数種の筆名[9]を用いて書かれているため，著作の確定が困難だという事情がある。加うるに，そうした著作は，ロシア語は無論のこと，フランス語，ドイツ語，英語，イタリア語などで，各国の学術誌，商業誌に発表されているため，国境を越えた広汎な協力がないかぎり，ロシア研究者ではそのすべてをフォローするのは不可能に近い。

第三に，彼の著作は小説，ルポルタージュ，回想記のたぐいから，地理学，社会学，民俗学，言語学，人類学，東洋学，経済学，生物学にかんする論文と，非常に多岐にわたっており，とても今日のように学問が極度に専門化された段階にあっては，一つの専門領域におさまりきらないのだ。わが国で学際的研究の必要性が叫ばれるようになったのは比較的最近のことだが，メーチニコフは100年以上も前に，身をもってそれを体現していたといっても過言ではない。

ちなみに今日のソビエトにおけるメーチニコフ研究では，ガリバルヂ義勇軍時代のメーチニコフへの関心から，イタリア研究者が彼に注目し，[10]また社会学，地理学の分野でのメーチニコフの思想の独創性，先駆性が近年再評価されはじめているようだが[11]，それら相互に研究上の連携がなく，その成果の公表も散発的で思想史的に彼の全体像を描き出しているものは皆無といっていい[12]。

---

8) メーチニコフ自身のアルヒーフは，彼の養女 H. B. コンチェフスカヤのアルヒーフの一部として残るにすぎない。См., А. К. и О. В. Лишины. „Лев Мечников-Революционный публицист и ученый". Л. Н. т. 87, стр. 461.

9) メーチニコフが用いた筆名の一部をあげておく。エミール・デネグリ，ガリバルヂーエツ，バサーリン，Л. М., Э. Д., レオン・ブランディ。

10) イタリア時代のメーチニコフを扱った研究としては以下のとおり。M. E. Семенов. „Русский гарибальдиец Л. И. Мечников", 《Ученые записки исторического факультета Киргизского гос. университета》. Фрунзе, 1958; В. Е. Невлер. 《Эхо гарибальдийских сражений》, М., 1963; А. К. Лишина. „Русский гарибальдиец Лев Ильич Мечников 《Россия и Италия》. Сб. статей, М., 1968; В. И. Виноградов. „Русские гарибальдийцы", 《Они сражались вдали от родины》, М., 1969; З. М. Потапова. 《Русско-итальянские литературные связи (вторая половина XIX века).》 М., 1973.

11) 地理学の分野でのメーチニコフ研究は，『文明と歴史的大河』の露訳者 M. Д. Гродецкий の解説 „Л. И. Мечников (Биографический очерк)", СПб., 1898 にはじまる。それ以後のものを以下に挙げる。H. Лебедев. Вступительная статья к книге 《Цивилизация и великие исторические реки》 М., 1924; Н. Никитин. „Лев Ильич Мечников", 《Экономическая география в СССР》, М., 1965, И. Лиоренцевич. „Л. И. Мечников", 《Социологическая мысль в России》, Л., 1978; またソビエト国外の研究としては，J. White. „Despotism and Anarchy, The Sociologial Thought of L. I. Mechnikov", *The Slavonic and East European Review*. 1976, No. 3, 小野菊雄.「エリ・イー・メーチニコフへの諸評価，その「地理的決定論」をめぐって」，『歴史学・地理学年報』，(九州大学教養部) 第5号，1981.

12) ロシア哲学史においてはじめてメーチニコフに一章を設けたものとして А. Галактионов, П. Никандров, 《Русская философия XI-XIX веков》, Л., 1970 は注目に値いする。しかしそこでの記述は「文明と歴史的大河」にあらわれたメーチニコフの世界観の紹介の域を出ない。なお小西善次氏の「レフ・イリイッチ・メーチニコフの社会的，経済的思想」，『明大商学論集』，第52巻第

だがこれらの要因は，つぎにあげるものにくらべれば，いまだ技術上の困難にすぎない。最大の要因は，誤まりをおそれずにいえば，ソビエトにおけるこれまでの思想史研究が，一種の革命中心史観に陥っていることだと私は予想する。そこでは革命的有効性といういわば結果論的な指標が，いまなお支配的なのである。こうしたアプローチからは，必然的にイデオローグ中心の思想史像が描き出されることになる。だが私の目下の関心対象であるナロードニキ研究に限定していえば，それをイデオローグ中心に論ずることは，ナロードニキ主義の思想的豊饒性をむしろ貶めることになる。いやそもそもナロードニキ主義と書くこと自体，問題の本質を誤まらせるもとなのだ。ナロードニチェストヴォとは，“主義” ではなく，ボグチャルスキイも言うように「全般的な気運」なのだ[13]から。そこには何千名にものぼる知識人が参加した。また直接参加せずともひそかにそれに共鳴したより多くの人々がいたはずである。“ヴ・ナロード” という言葉に各人がこめた意味は多種多様であったろう。その多彩さのなかにこそ，一大精神運動（たんなる革命運動ではない）としてのナロードニキ運動の真の歴史的意義がある。

したがってナロードニチェストヴォの明確な概念規定は，今の段階ではむしろ歴史の実相を歪めるもとだと私は考える。ここで取りあげるメーチニコフも，従来の概念規定にしたがえば，厳密にはナロードニキではない。プレハーノフの弔辞にもある[14]ように，彼自身は世代的には60年代人であり，70年代の“ヴ・ナロード”も体験してはいない。しかし思想のレベルでナロードニチェストヴォを捉えるとき，空間的な意味での“ヴ・ナロード”はかならずしも重要ではない。精神の領域においてナロードの世界観の原像を探り，それによってみずからの思想のありようを捉えかえすという営為もまた，広い意味での“ヴ・ナロード”であろうから。メーチニコフをナロードニキと呼ぶとき，私はこの呼称を以上のような広い意味で用いていることを，あらかじめ断っておきたい。

2. 革命思想におけるナショナルな契機

1860年代のいわゆる革命情勢期は，ポーランド反乱の起る1863年をもって終熄するというのが，いまや定説となっている。その後は政治的反動期がおとずれ，新たな社会的覚醒には1869年の学生紛争の再燃をまたねばならないとされる。現象的には確かにそのとおりで，反動期だからこそ，いたずらに社会総体の革命的変革を夢見るのではなく，眼を自己へとむけ，個人の精神的自立をはかることによって，むしろ日常性の革命化をはかるべきなのだと訴えるピーサレフ（1840–1868）の「リアリズム」が一世を風靡した[15]。

だがその一方で，それまでにない新たな変化が革命的青年たちのあいだで静かに起って

7，8号，1969，は，前掲書に依拠したものである。またメーチニコフの歴史的役割を側面から照らし出す研究として，В. Я. Гросул.《Российские революционеры в юго-восточной Европе》, Кишнев, 1973; Е. Л. Рудницкая.《Шестидесятник Николай Ножин》, М., 1975, がある。だがなんといってもメーチニコフの名をロシア思想史上で，クローズアップさせたのは，『文学遺産』，第87巻でのメーチニコフに関するアルヒーフ資料の一部発表であろう。„Из переписки деятелей освободительного движения. Материалы из архива Л. И. Мечникова", Л. Н. Т. 87 стр. 461–507. これはソビエトにおけるメーチニコフ研究の現段階を示すものとみていい。

13) В. Богучарский.《Активное народничество 70-х годов》, М., 1912, стр. 5,

14) Г. В. Плеханов. Соч., Т. VII. стр. 329.

15) 拙著『美学の破壊—ピーサレフとニヒリズム』白馬書房，1980年参照。

いたことも忘れてはならないだろう。そしてこの変化は，ピーサレフの死と符節をあわせたかのごとく，1868–69年に至って一度に顕在化する。あまり言われることがないが，この時期こそ，ロシア革命思想史における一つの転換点だと私は見る。一例としてこの年に出版された代表的な書物の名を思いつくままにあげてみよう。ラヴロフ（1823–1900）の『歴史書簡』，ミハイロフスキイ（1842–1900）の『進歩とは何か？』，ベルビ＝フレロフスキイ（1822–1885）の『ロシアにおける労働者階級の状態』。ほぼ同時期に出版されたこれらの書物に共通して見られるのは，西欧近代が標榜する普遍的進歩への懐疑であり，そこから発するロシアのナロードの復権の動きである。

60年代初頭にあっては，様相はまったく違っていた。社会的再生の基盤としての農村共同体を讃えても，チェルヌィシェフスキイ（1828–1889）には，ヨーロッパ的進歩の普遍性にたいする不動の確信があった。また知識人のナロードへの跪拝は，ピーサレフに見られるように，ロマンチシズムとして斥けられた。そればかりか，知識人の道徳的自己完成やナロードの啓蒙という知識人の社会的義務を説くラヴロフの論調は，60年代初頭の言論情況のなかでは抹殺されたも同然であった。

ところが60年代末になって，ラヴロフは復権し，ナロードへの精神的回帰現象が，知識人のあいだに起ってくる。別言すれば，ナロード不在のところで革命を語ることへの痛切な反省が生まれたのである。そしてこのときすでに，70年代の“ヴ・ナロード”への精神的準備はできあがりつつあったのだ。

メーチニコフと一見無関係に見えるこうした時代背景を概観したのはほかでもない，彼もまたほぼ同時期に，ナロードの原像をる探るべく，ロシア史の再検討の作業にとりかかっていたからなのだ。ここではその成果を示すものとして，1868年に再刊されたフランス語版『鐘（コーロコル）』[16]の第8号から13号にかけて連載された論文「ルーシにおける国家の敵対者たち」[17]を取りあげる。

論文の検討に入るまえに，ゲルツェンとメーチニコフの関係について若干知っておく必要があるだろう。それというのも，この時期になると，ウーチン，セルノ＝ソロヴィエヴィチらかつての革命結社《土地と自由》のメンバーを中心とする《若き亡命者》たちと，ゲルツェンとの思想的決裂は決定的となっており，そうした情況のなかで，ゲルツェンが《若き亡命者》の一員であるメーチニコフに，ロシア革命思想の源流を掘りおこすような重要な論文の執筆を依頼した意味は大きいからである。

《若き亡命者》とゲルツェンの思想的確執に焦点を当てた論文として，われわれはコズミンの「ゲルツェン，オガリョーフと《若き亡命者》[18]」を知っている。そこでコズミンはゲルツェンに対する「メーチニコフの立場ははっきりしない」[19]と書く。確かに1864年に

16) フランス語版『鐘』の歴史的意義については，ファクシミリ版の編者 E. Рудницкая の解説 „Французский《Kolokol》и его《прибавления》" М., 1978に詳しい。

17) „Les antagonistes de l'etat en Russie". *Kolokol* No. 8–13.

18) Б. П. Козьмин. „Герцен, Огарев и《молодая эмиграция》",《Из истории революционной мысли в России》, М., 1961, стр. 483–577.

19) А. И. Герцен. Соч., Т. XVII, стр. 431 なおメーチニコフ自身は，ゲルツェンと《若き亡命者》の確執についてつぎのように語っている。「《若き亡命者》は，新聞の編集が亡命者団体全体に依存すべきであり，バフメチェフ基金と『鐘』を確保する資金はこの団体に引渡されるべきだと要求した。

ジュネーブに居を移して以来，《若き亡命者》の一員として活動してきたメーチニコフが，「貴族的」なるがゆえに批判されたゲルツェンと共同の論陣を張るということは，残るメンバーの眼には，寝返りとも抜け駆けとも映ったであろう。だがここで忘れてならないのは，1865年にゲルツェン自身，《若き亡命者》をさしてこう評していることである。「……彼らには縁故も才能も教養もありはしない，ひとりメーチニコフだけが，書く力を持っているのみだ……」[20]（1月7日付，オガリョーフへの手紙）

ゲルツェンとメーチニコフの関係は1863年にまでさかのぼる。この年の夏，フィレンツェで開催されたポーランド蜂起支援集会でメーチニコフの演説を聞いたゲルツェンは，『鐘』紙上でそれを「目覚めたロシアの良心の最初の声」[21]と絶讃したのだった。このあと両者の関係はバクーニンという共通の友[22]を介して急速に深まったのであろう。64年の『鐘』にはプルードンのアナーキズムに関するメーチニコフのかなり長い論文が二篇載ることになる。[23]その後メーチニコフは地中海，黒海経由での『鐘』の国内搬入ルートを開拓し，一方ゲルツェンはメーチニコフに彼の事実上の妻となるスカリャーチナ夫人を紹介する。

だがこの時期メーチニコフをゲルツェンに接近させたのは，上述のような個人的因縁ではかならずしもない。68年段階でのメーチニコフ自身の思想的境位がそれを可能にしたのである。ゲルツェンの「貴族主義」「自由主義」を批判する《若き亡命者》のラジカリズムはメーチニコフにも分る。だが若いながら59年以来亡命生活を送り，ガリバルヂの義勇軍としての活動や中東，モンテネグロでの民族解放闘争にも加わったことのあるメーチニコフにしてみれば，新参者たる《若き亡命者》たちのラジカリズムが潜ませる思想的一面性，ともすると陰謀主義へと傾く彼らの権力志向をも見逃すことはできなかったであろう。革命とはさほど単純なことではない。それは一部の知識人の思い描く図式どおりに進むものではない。このことをメーチニコフは各地での実践活動をつうじて知悉していた。いやしくも革命を語るものは，より複眼的な視座を持ち合わせていなければならないのだ。

そしてこの複眼的視座ということで，ゲルツェン，オガリョーフ，メーチニコフのあいだにある種の黙契が成り立ったものと思われる。従来研究対象となることのなかったフランス語版『鐘』を，私はその一つの結実と見る。ここで複眼的視座の具体的内容を私自身の言葉で表現すれば，それは，水平軸と垂直軸の両方向におし広げた座標のうえに革命思想を置き，そこにおいて革命思想の現在のありようを再検討することとでもなろうか。ここでいう水平軸とは共時的な地理的広がりを意味し，垂直軸とは通時的な歴史的伝統を意

ゲルツェンは，主として『鐘』は文学事業であるのに，若き亡者命のなかにはおのれの文学的才能を立証する者がほとんどいないという論拠で，『鐘』の編集を手放すことに応じなかった……」，《Письма М. А. Бакунина к А. И. Герцену и Н. Н. Огареву》, Женева, 1896, стр. 530.

20) А. И. Герцен. Соч., Т. XXVIII, стр. 10.

21) А. И. Герцен. 《Точка поворота》.—《Колокол》, Л. 170. 1 сентября 1863 г.

22) См., Л. И. Мечников. „М. А. Бакунин в Италии в 1864 году", 《Исторический вестник》, 1897, №. 3. この回想記には，シベリアを脱出後，日本を経てヨーロッパに舞い戻ったバクーニンの尾羽打枯らした姿，ならびにその後彼がイタリアのアナーキストたちのあいだに共鳴者を得ていく過程がヴィヴィッドに描き出されている。

23) Л. И. Мечников. „Письмо к Прудону", 《Колокол》, Л. 185. 1864; „Прудонова 《Новая теория собственности》", 《Колокол》, Л. 218, 1866.

味する。前者は，シベリア，アジアなどの地理的周縁部から中央ロシアあるいはヨーロッパの歴史的現実を相対化する視座であり，後者は歴史的伝統の延長線上において革命思想を考察することにより，思想の借用過程において起りがちな抽象性，一般性を脱する試みといえようか。そして両者に共通するものは，革命思想における“ナショナルな契機”の再発見であった。

フランス語版『鐘』に即していえば，前者を担当したのがヴェニューコフ（1832–1901，著名なシベリア学者であり，幕末の日本を訪れ，1869年に「日本論」を出版）であり，後者の前史の部分をメーチニコフが，西欧化のはじまる18世紀からデカブリストにいたるまでの近代史の部分をゲルツェンが担当し，[24] 現代とりわけ農村共同体の現状分析をオガリョーフが受けもった[25]ようだ。しかもここで挙げた四人のうち二人までが日本と因縁浅からざる人物だということが私には限りなく面白い。

ところでメーチニコフの当該論文の冒頭にあるつぎの言葉は，以上の文脈においてみると一層明らかになる。「すべての国—立憲君主制，非立憲君主制の別なく—の全体としての歴史は今日二つの相異なる原理，二つの相異なる党派のあいだの，程度の差こそあれ，苛烈かつ不断の闘争という観点から考察され得る。かたやナショナルな原理，かたや権力を代表する原理である」[26]。

ロシア思想史に少しでも通じている読者なら，ここでメーチニコフが用いる“ナショナル”という言葉を幾分奇異に感ずるにちがいない。ロシアでは40年代のスラヴ派以来，国家の構成員たるナーツィヤと，民衆としてのナロードを峻別してきたのだから，実際この語法はゲルツェンにも奇異に映ったようだ。オガリョーフにあてて彼はこう書く。「彼（メーチニコフ—筆者）は多分“ナショナル”という言葉で何か“ナロード”に類したものを含意しているのだろう」[27]（1868年5月12–13日付の手紙）と。

ではメーチニコフは“ナショナル”という語を誤用したのか？けっしてそうではあるまい。私の考えでは，彼は誤解されることを承知のうえで，あえてこの語を用いたのである。彼自身つづけてこう書く。「すでに“ナショナル”という言葉は，あまりに多用，濫用されてきたのでここで誤解をさけるためにも，わが読者に若干の説明をしておく必要があろう」[28]と。

確かにゲルツェンの洞察するとおり，メーチニコフは本論に入るとあえて“ナショナル”という語に拘泥せず，それをナロードに置きかえてもいる。にもかかわらずメーチニコフにしてみれば，冒頭でナロードではなく“ナショナル”（ナーツィヤ）を前面に出す必要性があったのだろう。それは何故か？フランス語版『鐘』の刊行目的は，それがロシア語ではなくフランス語でなされていることが示すとおり，第一に西欧知識人のロシアにたいする偏見を正すことであった。その意味ではゲルツェンが40年代末以来，生涯をかけて

24) A. I. Herzen. „Etudes historique sur les heros de 1825 et leurs prédécesseurs…"
25) N. A. Ogareff. „La Russie actuelle et son développement", *Kolokol*, No. 1, 2, 3, 4, 6, 8, 10,
26) L Mecznikoff. „Les antagonistes de l'etat en Russie", *Kolokol*, в русском переводе. М., 1978, стр. 62.
27) А. Н. Герцен. Соч., XXIX, кн. 1, стр. 338.
28) L. Mecznikoff. Там же. стр. 62.

行ってきた事業の総仕上げだったといっていい。そうであればなおのことはじめからスラヴ派のように，西欧の個人主義原理とは異質なナロードの原理（ホミャコーフの提唱するソボールノスチはその典型）を持出すことは，西欧とのコミュニケーションをみずから断つことになるだろう。それを避けるためにも，西欧との共通タームたる“ナショナル”を用いる必要があったと思われる。

だがそれだけではない。ロシアのナロードは無国家の民という K. アクサーコフの定義に示されるように，スラヴ派にはナロードから政治性を極力排除しようとする志向がある。これに対しメーチニコフは政治性をいっさい帯びることのないナロードという把握は，19世紀後半にあっては単なるユートピアにすぎないと考える。問題はその政治性のむかう方向なのだ。スラヴ派は物言わぬナロードのなかに，真のキリスト者（クレスチヤーニン＝農民）のしたたかな真実をもとめたが，イタリアで，バルカンで民族解放闘争を闘ってきたメーチニコフは，スラヴ派のナロード観に情緒的なロマンチシズムの臭いを嗅ぎとったであろう。国家権力と対峙し，拮抗しうるだけの潜勢力をもったナロード，これをさしてメーチニコフはナーツィヤと呼ぶのである。いかにスラヴ派が力説しようと，西欧人の眼から見れば，物言わぬナロードはまたロシア帝国を支える臣民にちがいない。こうした西欧人のロシア観が偏見だという以上，権力に対峙し得るナロードを復権し，これがナショナルなロシアなのだと突きつける必要性がメーチニコフにはあったのだ。

またよほど言語に通じていないかぎり，peuple (народ) と書かれれば，読む者はまず集合的な衆としての響きを覚えるだろう。だがメーチニコフが意図したのは，数量的な意味でのナロードの復権ではない。ロシアにおける革命的伝統の質を何よりも語りたかったのである。そのためにこそ，彼は民族色を帯びるナーツィヤをあえて用いたとも考えられる。したがって今日の日本語の語法では，メーチニコフの用いる“ナショナル”は，ある場合には土着的とでも翻訳してよいものである。革命思想は何も西欧の専有物ではない。それぞれの国に，その国の民族的，歴史的条件に規定された革命思想の伝統があってもいいはずだ。そうした伝統を内に取りこめない革命思想はむしろみずからの一面性を知るべきなのだ。こうした痛切な思いがメーチニコフをとらえていたにちがいない。だからこそ序のむすびでこう書くのである。「文明世界の未来が，半野蛮な汗国の住まうヴォルガ―ヨーロッパ河川の巨人ともいうべき―や，ドン，ドニエプルの河口あたりに広がった広大無辺なる平原の豊穣なる大地に潜んでいるといわれたら，文明におけるわが年長の同胞ヨーロッパのこと―筆者）の当然の誇りはおそらく傷つけられることだろう」[29]と。

民族性を剝奪された革命思想は抽象的スローガンと化し，ある場合にはそれは後発国に多大な犠牲を強いることになるとメーチニコフは考えるのである。革命思想は民族性を掘りさげることによってむしろより豊かさを増し，そうした営為を追究するなかではじめて普遍性を獲得するのであり，その逆であってはならない。このようにメーチニコフの論文は，現代のわれわれが直面している問題にまで答えるかのごとくきわめて意欲的かつ論争的な性格のものであった。

ところでこう書くと民族主義（ナショナリズム）とは狭隘なものであり，閉鎖的かつ排外的になるから，革

29) L. Mecznikoff. Там же. стр. 63.

命をめざすものはまず民族的自己否定が必要だとの批判がでるだろう。だがそうした批判はメーチニコフの用いる“ナショナル”の意味の誤解から生じる。彼は“ナショナルな原理”をこう定義する。それは「個々の孤立した政治単位の自治（オートノミー），したがって多様性，分離，あらゆる意志の自由な発現をめざす」[30]と。ここには後に「左派バクーニン主義者」[31]とも評されるメーチニコフのアナーキズムの本質がよくあらわれている。彼がめざすものは個の多様性とその限りない自由（ヴォーリヤ）の実現なのであり，それを育くむものとしてほかならぬ“ナショナルな原理”を位置づけているのである。

これに対立する“権力の原理”は，メーチニコフによると，一元的かつ中央集権的であり，「単一性，秩序，均衡，安寧を目的とする集団的利益による個の意志の併呑へと向かう」[32]ものである。そして前者こそが「歴史の動態的（ダイナミック）要素」であり，一国（ナーツィヤ）の歴史を論ずるものは，何よりもこれに注目せねばならない。ところが西欧に一般的なロシア史観はこの要素を視野におさめず，もっぱら「静態的（スタテイック）要素」たる権力の歴史に終始しているところに偏見が生ずるのであると。「ロシアの権力の歴史は今日のヨーロッパではよく知られている。けれどそこではコサックの野蛮性，民衆の逼塞と隷属，貴族の社交性と洗練度（それとてさほど誇張する要なしと付言されるのだが）といった伝統的な伝説に合致せぬすべてのロシア的なるものが……頑なに無視されつづけている」[33]とメーチニコフは慨嘆する。しかもこうしたロシア史観は，西欧ばかりでなく，当のロシアにおいても支配的なのだと彼は考えていく。このときメーチニコフが念頭に置くのはC.ソロヴィヨフに代表されるいわゆる国家学派の歴史家たちである[34]。だからこそなおのこと民衆史の発掘の必要性が叫ばれねばならない。

「民衆的要素の歴史についていえば，われわれロシア人にとっても，それを知ることができるようになってからまだあまりに日が浅い。アルヒーフがわが国の研究者のために公開され，われわれに隠された部分だとはいえ，わが民衆史においてつねに顕著な役割を果してきた諸事実や人物に言及することが可能になったのはごくごく最近のことなのだ」[35]

民衆史の発掘という構想は，『ロシア』や『ロシアにおける革命思想の発達』を書いたときのゲルツェンにも萌芽的にはすでにあった。しかし資料的制約と，その後のロシア国内の政治的高揚もあって，ロシア史のより古層へと分け入ることは彼にはできなかった。それをメーチニコフは最新の研究成果[36]を踏まえておこなおうとするのである。

---

30) L. Mecznikoff. Там же. стр. 62.

31) Н. К. Лебедев. „Вступительная статья к книге《Цивилизация и великие исторические реки》, М., 1924, стр. 6.

32) L. Mecznikoff. Там же. стр. 62.

33) L. Mecznikoff. Там же. стр. 62-63.

34) C. ソロヴィヨフはコサック制度を国家の「敵」，歴史的進歩のブレーキだと捉える（《Очерки истории исторической науки》, Т. II, стр. 143）なおこの点についてはルドニツカヤがすでに指摘している。„*Kolokol* (*1868-1869*) в русском переводе", М., 1978. стр. 144.

35) L. Mecznikff. Там же. стр. 63.

36) メーチニコフが „ナショナルな原理" に着目するきっかけを与えた研究として Н. Костомаров: 1)《Богдан Хмельницкий》2)《Бунт Стенки Разина》, 3)《Лжедмитрий》(Смутное время Московского государства); А. Щапов.《Аграрная Россия и религиозные расколы》をあげることができる。

ここで彼の構想を紹介しておこう。「コサック制度と宗教的諸分派(ラスコールイ)は，それ自身の内部にロシアの民衆的要素を具現化したもっとも広汎な組織であり，それは国家の圧制に抗し，今日なお社会生活において一定の意義を保持しているのである」[37]とメーチニコフは書く。この言葉にみられるように，土着的な反国家思想の源流としてメーチニコフがコサックと分離派に着目したことは重要である。スラヴ派や，ドストエフスキイらの土壌主義者のあいだでは，60年代初頭から分離派への注目がはじまってはいたが，それから数年の隔たりをへて，革命派の内部でも宗教運動をそれが非合理的なものだという理由で片付けないだけの質的変化が起っていたということだろう。たとえ非合理なものにせよ，それも現実だという醒めた眼を彼らが獲得したのだといってもいい。残念ながら当該論文におけるメーチニコフの分析はコサック制度と動乱時代(スムートノエ・ヴレーミヤ)における偽ドミートリイの意義についてまでで，分離派にはおよばなかったが，少なくとも彼の視野に分離派が入っていたことは銘記する必要がある。なぜならこうした問題意識から，70年代に入るとメーチニコフの関心は民俗学，フォークロア，神話学へと広まっていく[38]のであるから。

3. メーチニコフの史眼に映ったコサック制度

革命思想におけるナショナルな契機に焦点を合わせるメーチニコフの論文はゲルツェンも非常に気に入ったらしく，第一論文を読むやゲルツェンはオガリョーフにこう書いている。「メーチニコフの論文は素晴しい——だがコストマーロフへの論争と応酬を少なくすればもっと良いのだが。ヨーロッパにとっては物語が，事実の叙述が必要なのであって，コストマーロフなどどうでもいいのだから」[39]さきほどメーチニコフの論文はきわめて論争的なものだと書いたが，ゲルツェンの眼にもそう映ったのである。しかしゲルツェンのこのコメントは，ヨーロッパの読者のみを念頭に置く編集者としての意見であり，メーチニコフが何故論争的にならざるを得ないかを十分には理解していない。比較的短かいものながら，メーチニコフにとっては転機ともなったこの論文で彼がめざしたのは，単なる知られざるロシア史の紹介ではなく，歴史学の方法そのものの転換だったのである。ここにこそ私は《若き亡命者》メーチニコフのラジカリズムを見る。彼は個別的なロシア史を掘り下げることによって，普遍的な世界史像の再検討さえ迫れると確信したのであろう。

それではこのメーチニコフの眼にコサック制度はどう映ったか？「ここでわれわれは，上述の著作を引用しつつ，ロシア国家の内部で機能した敵対的要素の歴史の数ページに光を当てるよう努めたい。そうした要素は数世紀の流れのなかで圧殺され，今では物言わぬ存在となってはいるが，まさしく《死して埋葬された》と思われたときに，すでに一再ならず強力かつおそるべき力をもって蹶起したのであった。それは今日の暗鬱な沈黙にもかかわらず，明らかにその諸々の志向と原初の生命力を喪失してはいないのである」[40]

無告の民という表現があるように，ナロードはおのれの上にふりかかる苦難，圧制にひたすら耐える。だがたとえ言葉にならないからといって，彼らが何も考えていないというこ

37) L. Mecznikoff. Там же. стр. 64.
38) たとえば „Культурное значение демонизма", 《Дело》 1879. №. 1 などはその例であろう。
39) А. И. Герцен. Соч., Т. XXIX, кн 1, стр. 338.
40) L. Mecznikoff. Там же. 63.

とにはならない。これは当り前のことである。確かに社会総体の変革をめざすものにとっては，寡黙な受苦的存在たるナロードは，重荷に感ずることだろう。またナロードは容易に安逸さへと流れる打算，狡猾さをもそなえていよう。だが，だからといって彼らを意識の遅れとして片づける前衛主義者があるとすれば，それはみずからの思想，行動様式の一面性，性急さを顧みるべきである。メーチニコフがロシア史に探しもとめるのは，そうした一見どうしようもない存在であるナロードのなかに伏流のように流れる伝統的革命精神なのだ。

歴史の古層に分け入るといっても，メーチニコフがもとめるのは過去の良き時代を懐旧するというような後ろむきのユートピアではない。「過去へと向きなおるからといって，進歩への反動ということにはかならずしもならない。とくにもはや存在する資格のないものを甦えらせるためにではなく，まさにかつてあったものの存在の意味を正確に定義するために過去へと向うとしたらなおさらである。そのような模索と発掘は……今後われわれが従うべく予定されている道程に光を当てるばかりなのだ」[41]社会進歩の道程は，社会科学でしばしばいわれるように既成のものとして直線的に延びているのではなく，紆余曲折に富むものである。こうした歴史認識は，その後のアジア（日本）体験をへて，最晩年の著書『文明と歴史的大河』で展開される世界史の綜合の試みにいたるまでメーチニコフのなかに生きつづけることになる。歴史とは現代から見ると不合理に充ちている。にもかかわらず民衆を《歴史の賦役》へと駆り立てる背後の力とは何なのか，これをメーチニコフは死の床にあってなおもつかもうとしていたのであるから。

コサック制度の成立過程を，主にコストマーロフの著作を引用しつつ紹介したうえで，その盗賊行為，残忍性にもかかわらず，なぜ民衆はコサックに強い共感を示すのかとメーチニコフは問う。民衆歌謡やフォークロアによって語りつがれる義賊伝説に彼は大きな意味を見いだすのである。「コサックはモスクワの君主制度に対置するものとして，冒険とあらゆる束縛からの自由に充ちた生活の誘惑以外なにも示すことはできなかった」[42]とコストマーロフは書くが，メーチニコフはそんなはずはないと反論する。なぜなら冒険にひかれて自分たちを掠奪し圧迫するものたちを叙事詩のヒーローにするほど，ロシアの民衆はロマンチストではないからだとメーチニコフは断ずる。そうではなく，民衆自身がモスクワ国家の《秩序と法の体制（レジーム）》よりも，コサックの生活の《無秩序と偶然の成功》をよしとしたからなのだ。その意味ではコサック制度こそが，ナロードの精神を体現していたのである。「ナロードはすすんで，……コサックが保持し弘めたところの原理を受容したのである」[43]

ところが一般の識者（コストマーロフも含め）は，コサック全盛時代と現在のロシアを比較し，そこに著しい進歩を認め，この進歩は君主制国家の勝利とともに達せられたと結論する。こうした現在から過去を見下す進歩主義的歴史観にたいし，「国家の勝利のおかげで進歩が生じたのか，それとも国家の勝利と無関係に，あるいはひょっとするとこの勝利に反して，数世紀の運動の不可避的賜物が進歩であったのか」[44]それを問うべきだとメーチ

41) L. Mecznikoff. Там же. стр. 70.
42) L. Mecznikoff. Там же. стр. 69.
43) L. Mecznikoff. Там же. стр. 69.
44) L. Mecznikoff. Там же. стр. 69.

ニコフは迫る。もし前者だとしたら，なぜ民衆は「国家の敵対者の敵対者」すなわち諸侯やツァーリを伝説のなかで讃えないのか？メーチニコフ自身，こう問いつめながら，唯一の例外としてイワン雷帝があることを知っている。安易な民衆史観を越えるためには，イワン雷帝の持つ民衆性の秘密を探ることを怠ってはならない。国家権力の象徴たるイワン雷帝を民衆が支持したことは一見明らかに矛盾である。「明らかな矛盾だ！ロシアにおける自治制度の人気というわれわれのユートピアは粉々に砕かれたか！，明らかにこのナロードは，勝者と敗者，創造者と破壊者を同一の帝座にひきあげたのか？」[45] とメーチニコフは問う。

では一見矛盾と思われる歴史的事実をメーチニコフはどのように解釈していくのか？彼はその導きの糸を，イワン雷帝によって召集されたゼームスキイ・サボールにもとめるのである。「コサックの影響がほぼロシア全土に広まったとき（17世紀初頭），彼（雷帝）はゼームスキイ・サボールによってそこに統治を確立することに成功したのである」[46] このゼームスキイ・サボールの召集は短命に終わり，じきにボヤールスカヤ・ドウーマにとって代られるが，雷帝が民衆の共感を得るには召集の事実だけで十分であった。ファクシミリ版『鐘』の編者ルドニーツカヤは，こうしたメーチニコフの見解をさして「批判に耐えない」[47] と注釈をつけるが，はたしてそう言い切れるだろうか？民衆とは無誤謬の存在ではなく，往々にして権力によって欺かれるものだ。だが民衆はあくまでも権力がちらつかせる“ナショナルな原理”に欺かれたのであって，権力の原理に屈したのではないとするメーチニコフの解釈はなお再考に値いする問題提起ではなかろうか？

話をコサック制度に戻そう。メーチニコフは“ナショナルな原理”を体現するコサック制度の特徴をつぎの三点に要約する。「1. 諸部分の分離主義（セパラチズム）と自治（オートノミー）の原理。それは当時のいかなる国家形態とも相容れぬものである。2. すべての自由人（ヴォーリヌイ）あるいは《同胞（バニブラート）》（小ロシアのコサックたちは互いにこう呼びあう）の絶対的平等ともっとも完全な個人的自由。3. 国の自然の富の共有と共同利用」[48]。地域によってその主たる生産活動や気質は異なるが，上述の三点はすべてのコサック共同体に共通するものである。そして何よりも重要なことは，こうしたコサックの自由な共同体《クルーク》が，国家権力によって支配される民衆のなかにも《ミール共同体》として受けつがれているという事実である。「一言でいえば，上述の穀種（＝共同体精神）は民衆の自由意志と理性によって創造された整然たる経済制度へと発展したのである。

そのような占有様式の主たる長所は，それが各人に完全な自由だけではなく，自分の労働と力を彼がもっとも有利かつ適当と思うもののために使用する完全なる可能性をも提供することである」[49]（傍点—原文イタリック）ここに見られる共同体観はナロードニキ，とりわけ60年代初頭にチェルヌィシェフスキイによって展開されたものとまったく軌を

45) L. Mecznikoff. Там же. стр. 69.
46) L. Mecznikoff. Там же. стр. 70.
47) Е. Рудницкая, Там же. 140.
48) L. Mecznikoff. Там же. стр. 70.
49) L. Mecznikoff. Там же. стр. 71.

一にしている[50]。共同体所有とは因習として保持されているのではなく，何よりもそれが各人にとって経済的に有利であり，なおかつ個人の自由を保証するがゆえにかくも広汎な広まりを見せているのである。しかも忘れてならないのは，それがコサックの自由な精神から発したものである以上，共同体に生きるという一点だけでも民衆にはつねに権力に対峙し得るだけの胚種が宿っていることになる。以上のようにメーチニコフは考えるのである。

だがこう言ったからとて，彼は現実の共同体を理想とせよというわけではない。権力への抵抗の拠点[51]，来るべき自由社会の経済的基盤として共同体に注目するのだ。「われわれはこれまで述べてきた制度を進歩の理想とみなすことからはほど遠い。だがコサック制度あるいはより正しくはロシアのナショナルな精神(その一つの表現がコサック制度である)がそれ自体のうちに新たな政治生活の萌芽を包含していることはまったく議論の余地がないように思われる」[52] "ナショナルな精神" を見すえることによって獲得される変革思想（であるがゆえにナロードの共感を得る）こそが，真に強力な武器となるということだろう。そして一般の通念には相違して，真に "ナショナルな精神" を掘り下げるものこそが，閉鎖性ではなくより高次の普遍的連帯へとたどりつくことができるということだ。17世紀のポーランド—トルコ戦争の際にボルガ下流のコサックが小ロシアのコサックと大同団結してポーランド擁護にまわった事実はこのことを如実に示していると[53]。こう書くメーチニコフは，1863年のポーランド蜂起に際して多くのロシア知識人，民衆がみせた狭隘な民族主義を苦々しく思っていたにちがいない。"ナショナルな精神" をとことん掘りさげるコサック精神はどこに行ってしまったのかと。

4. 日本への "ヴ・ナロード"

明治7年春，東京外国語学校魯語科の教壇に立ったメーチニコフは以上のような思想的背景をすでに持っていたのである。しかも『鐘』の論文執筆直後に動乱のスペインに赴き，『聖ペテルブルク通報』紙の特派員の肩書でバルセロナを中心に半年滞在し，各地を探訪，その旅行記を『祖国雑記』(1869年，第2-5，11，12号）に発表している。そしてこのスペイン行が，単なる取材ではなく，バクーニン主義の伝道の旅でもあったことはほぼ明らかである[54]。ちなみに J. ジョルはその著『アナキスト』でスペインにおけるバクーニン主義の普及はイタリアのアナキスト，ファネッリに負う[55]と書くが，まったく同じ時期にバクーニンと直接親交を持つメーチニコフがその地に潜入していたことも忘れてはなるまい。この時期，ヨーロッパの革命運動は，今日では想像もつかぬほどの国際的つながりを

50) チェルヌィシェフスキイの共同体観については拙稿「革命と民衆—チェルヌィシェフスキイの共同体論の複眼的構造」，金子幸彦ほか編『チェルヌィシェフスキイの生涯と思想』，社会思想社，1981，を参照されたい。

51) メーチニコフは同じ論文でこう書く。「私が念頭においているのは，国家への抵抗の精神であり，そのもっとも完全な表現としてコサック制度は今日まである」L. Mecznikoff. Там же. стр. 75.

52) L. Mecznikoff. стр. 77.

53) L. Mecznikoff. Там же. стр. 68.

54) Б. Козьмин. Письма Л. И. Мечникова. Л. Н. Т. 62, стр. 389.

55) J. ジョル『アナキスト』，萩原，野水訳，岩波書店。

持っていたのである。それだけに当時の革命運動の震源地ともいうべきロシア，ポーランド，イタリア，スペインを，人的つながりでいえば，ゲルツェン，バクーニン，リュドヴィク・ブレフスキイ，ガリバルヂを結びあわせ得る人物としてのメーチニコフの役割は貴重だったにちがいない。

さらにパリ・コンミューンの救援活動のためヨーロッパを駆け回るなかで，彼は《革命》なった日本ともつながりを持つようになる。1872年9月，大山巌の前にひょっこり姿を見せたメーチニコフはすでに日本語を理解していた。では彼は誰れに日本語を習ったのか？また何が彼を日本へと引寄せたのか？この間の事情を最近メーチニコフの小伝を著したカルターシェワはつぎのように書く。少々長くなるが日本人であるわれわれには興味ぶかいことなので引用しよう。

「ガリバルヂの遠征，ポーランド反乱，スペイン革命—これぞ輝ける十年の偉大なる事業目録である。だがガリバルヂは名誉の流刑にあり，ワルシャワではつい最近，最後の銃殺の一斉射撃が轟き，また一命を取りとめた者も，シベリアへと死出の旅路につかされた。

だが〈共和主義者でアカの危険人物…〉（イタリア駐在ロシア大使は彼をこう呼ぶ）たるレフ・イリイッチ・メーチニコフは，ロシアに戻ることはできなかった。かくしていつしか思いは長期にわたる悪天のヨーロッパから極東へとむかったのである。1874年初め，メーチニコフは日本へ出立する決心をした。

しかしそれは多くの原因から困難であった。まず旅行用の資金がまるでなかった。……《懐中に一銭も持たずにどうやって日本へ辿りつくのかという問題は，私には日本そのものよりも謎に思われた》—とメーチニコフはおどけて書く。

さらにもう一つ非常に本質的な問題があった。ヨーロッパで可能な範囲内で日本の研究をせねばならない。なにをおいても日本語を習得する必要がある。

ヨーロッパ諸語で書かれた日本関係の文献はいたって乏しい。言語にいたっては事情はさらに悪かった。日本語の講座があるのはパリ大学だけだった。メーチニコフはパリへ出かけた。この講座を担当していたレオン・ド・ロニ教授は，すりきれた服をまとい，もじゃもじゃの髭をはやし，額は大きく禿げあがり，疲れ切った眼をし，いかにも田舎教師然とした背の低い男をまじまじと見るのだった。教授は多少皮肉まじりに，エキゾチックな言語を学ぶ可能性について，メーチニコフにとくと説明した。

——四年のコースを聴講しても，半分はまちがいをおかしつつ，どうにか日本語で意志を通じさせることができるだけで，日本の書物の読解にいたっては四分の三は間違えることでしょう——と。

だがメーチニコフの自己紹介から，このロシアのジャーナリストがすでに十のヨーロッパ語と三つのアジア系言語をマスターしていると知って，親切にもロニ教授はヨーロッパ文化とフランス語の習得のためにヨーロッパを旅しているある日本人公爵（クニヤージ）（誰かは不明だが，筆者は鍋島直大（なおひろ）と予想している。）への推薦状を彼に与えるのだった。

——多分，彼はあなたを気に入って，あなたを教師にし，彼のほうでも日本語の会話を教えてくれるでしょう」——。

ド・ロニ教授に指定されたジュネーブのホテルにメーチニコフが行ってみると，くだん

の日本人公爵はニースへと去り，かわりに彼の部屋には別の日本人（大山巌のこと）が住んでいた。この男はフランス語が皆目分らなかったが，メーチニコフは首尾よく彼から日仏語の交換教授の同意を取りつけることができた。

メーチニコフの上達はめざましく，早くも数カ月後には，ヨーロッパに滞在中の日本使節団の随員たちとかなり自由に意志を通じさせることができたほどである。一方日本人の方でも，この博識のヨーロッパ人がいたく気にいり，使節団の長は日本へ来て，首都で薩摩藩のサムライのために普通学校を組織してくれぬかと依頼するのだった」[56]

長々と引用したのはほかでもない，かつて私はメーチニコフに日本語を教授した人物として，パリ時代の中江兆民の親友，飯塚納（おさむ）の名をあげておいたが[57]，引用文の記述が正しいとすると，訪日以前のメーチニコフの日本人との交友はさらに幅広いものだったと予想される。何よりも彼が，当時ヨーロッパ歴訪中の使節団（いわゆる岩倉使節団）と交渉を持ったと推測されることは注目すべき事実であろう。なぜならこのことは岩倉使節団の公式記録ともいうべき『米欧回覧実記』の従来の解釈にいくつかの修正や補足を加えるものともなり得るからだ。

たとえば田中彰氏の労作『岩倉使節団』を取りあげてみよう。それによると『回覧実記』のパリの記述では，コンミューンの弾圧者ティエールを讃美し，コンミューンの人々を「賊徒」，「暴徒」，「賊軍」などときめつけていることを論拠に氏は，こうしたコンミューン観を「勝者の論理」と規定し，かつての幕臣成島柳北のそれ（「敗者の心情」）と比較しているが[58]，同じ使節団の随員の中にほかならぬ「賊軍」の支持者メーチニコフと肝胆相照らすような人物がいたことも忘れてはならないだろう。以前私は，メーチニコフの「明治維新論」を翻訳したときに，彼が使節団の海外における行状にあまりに通じていることを不思議に思い，おそらくそうした情報は滞日中に，中江兆民や田中光顕あたりから仕入れたのではないか，と解説に書いた[59]。例えば使節団の三巨頭岩倉，大久保，木戸をそれぞれ「家父長的君主主義者」，「フランス第二帝政を範とする軍国主義者」，「立憲主義者」と定義し，なかでもカルチェ・ラタンに居を定め，留学生の助けを借りて市民社会の本質を理解することにつとめた木戸孝允の民主的精神に期待をかけている点，また「日本の維新を指導した少数の国家的人物—1872年から1874にかけて，全欧州，北アメリカ合衆国を歴訪した使節団の団長の岩倉，さきの文部卿の木戸，長いこと外務卿をつとめた副島はじめその他多くの人たちが，今日なお“ピョートル・ベリーキイ”—「ヴ」の発音が苦手な彼らはピョートル・ヴェリーキイ〔大帝〕をこう呼ぶのである—の熱烈なファンである」[60]といった迫真の記述はメーチニコフが使節団と直接交渉を持ったとみて，はじめて納得がいく。

そればかりではない。イタリアのリソルジメントの「三傑」の評価をめぐって，同じく田中彰氏は，マッツィーニ，カブールがまったく無視され，ガリバルヂだけが「英傑」

56）К. С. Карташева. Указ. книга, стр. 18-20.
57）拙訳『亡命ロシア人の見た明治維新』183-184ページ。
58）田中彰『岩倉使節団』，講談社，110-118ページ。
59）拙訳，前掲書，187ページ。
60）前掲書，25ページ。

「雄将」と目され，その「民権家」としての功績が強調されている点を指摘し，そうした評価が栗本鋤雲，成島柳北，さらには明治20年代の民友社のガリバルヂ評価に比して異彩を放っていることを縷々述べておられる[61]。だがそれではさきに述べたコンミューンの評価とあまりに論調が異なりはしまいか？そこでここからは仮説の領域に入るが，イタリアをはなれてほぼ一カ月後スイスを訪れた使節団は，大山巌の紹介で会見したであろうかつてのガリバルヂ軍の副官メーチニコフから，イタリアのリソルジメント運動の意義およびガリバルヂその人の人柄について話を聞く機会を持ったのではなかろうか？ちなみにメーチニコフは1861年に「ガリバルヂ軍兵士の手記」なる長大なルポルタージュを『ロシア通報』誌に連載し[62]，1864年にはバクーニンの依頼でポーランド蜂起支援のために地中海艦隊の派遣をはたすべく急拠ガリバルヂの隠棲するカプレラ島に飛んでもいる[63]のである。だとすればイタリアの話が出たときに，メーチニコフがガリバルヂについて触れない方がむしろ不思議である。

以上のようにカルターシェワの記述（それはメーチニコフ自身の「日本回想記」にもとづいていると予想される）は，従来不明だった多くの問題に光を当てるものではある。だが日本側の資料とくいちがう点もいくつか散見される。第一にメーチニコフには日本への思いがまず先にあって，しかるのち日本人とのつてをもとめたことになっているが，それはどうであろうか？反動的ヨーロッパを捨て，維新なった極東の島国へ——といえばメーチニコフの革命的ロマン主義を印象づけるにはいかにも効果的であるが，いささか牽強附会にすぎはしまいか？無論メーチニコフは幕末の動乱については，『鐘』の同人ヴェニューコフの著書[64]から，また明治維新についても新聞報道ですでに知ってはいた。だが真相はやはり当時パリに数十人いたといわれる日本人との接触から日本への思いを募らせたとみるべきだろう。なぜなら大山の日記にもあるように，1872年9月，大山のもとを訪れたメーチニコフはすでに「能ク日本語ヲ解シタ」[65]というのだから。とまれ1874年早春，メーチニコフは日本へ向けて出発する。

時あたかもロシア国内では“ヴ・ナロード”運動が絶頂期をむかえようとしていた。そんななかで，方向ちがいの日本へとむかうメーチニコフの胸中には，いや，これも形をかえた“ヴ・ナロード”なのだという思いがあったろうと私は想像する。このことは，私自身のナロードニキ研究の方法視角とも関連するので数言述べておきたい。知ってのとおりナロードニキのなかには，ゲルツェン，チェルヌィシェフスキイ以来，いわゆる《後進性の優位》という思想がある。ヨーロッパに対して遅れているがゆえに，ロシアは前者が陥っている袋小路をさけて自由な未来社会（社会主義）へと到達できるというのがその骨子である。具体的には彼らはこの確信から発して，農村共同体およびそこに生きるナロードの社会的可能性を再評価する。だがそれだけでは，ロシアの歴史的遅れを社会主義という理

61）田中彰，前掲書，170-178ページ。
62）Л. И. Мечников. „Записки гарибальдийца". 《Русский вестник》, 1861. тт. 9, 10, 11.
63）この間の事情については，Л. И. Мечников. „М. А. Бакунин в Италии в 1864 году", 《Исторический вестник》, 1897. №. 3を参照。
64）М. И. Венюков. 《Очерки Японии》, 1869.
65）『元帥公爵大山巌伝』，東京，1935年，352ページ。

想実現のために単に利用したにすぎぬとの解釈もまた成り立ち得るだろう。したがってそうした解釈を斥けるためには，ナロードニキが注目した《後進性》の中味をより深く吟味する必要がある。そのための作業仮説として，私はナロードニキのアジア観の検討が不可欠だと考えてきた。なぜなら対ヨーロッパとの関係では，アジアにこそ《後進性》はより凝縮されたかたちで観察できたであろうから。そしてもしアジアの《後進性》についてナロードニキがその歴史的意味を掘り下げる作業を怠たり，歯牙にもかけなかったとしたら，共同体もナロードも彼らにとっては所詮手段にすぎなかったということになるだろう。

実は以上のような作業仮説を持ったとき，私の視野の中にメーチニコフという人物がクローズアップされてきたのである。結論を先に言えば，アジア文明の特質を掘りさげようとするメーチニコフの先駆的試みは，"ヴ・ナロード"運動と思想的に同根のものであったということだ。

「明治維新論」の冒頭でメーチニコフは「これは歴史上われわれが知り得るもっとも完全かつラジカルな革命(ペレヴァロート)である」[66]と書く。維新に対するこのような高い評価にわれわれはいささか戸惑いをおぼえるが，ヨーロッパの現役の革命家の眼には少なくともそう映ったという事実は重要だろう。日本史の分野では維新の評価をめぐって，いまだに議論が絶えないようだが，そこにはその後の日本の近代化が歩んだ道程から推して維新そのものに評価をくだす傾向が根強く残っているのではなかろうか？だが革命とは理念ではない。にもかかわらずわれわれは純粋理念としてそれをヨーロッパから移入してきたのではなかろうか？その点早くも19世紀40年代にスラヴ派と西欧派の論争を体験してきたロシア知識人は，西欧思想の土着化についてはより自覚的であった。ましてやすでに十数年を無国籍の亡命者としてヨーロッパで暮してきたメーチニコフにしてみれば，市民社会の理想とされる西欧社会が一方で持つ保守的，独善的体質をいやというほど味あわされされてきたにちがいない。その意味ではメーチニコフはいわば西欧文明を相対化できる立場にいたわけだ。言葉をかえていえばヨーロッパにとっての境界人(マージナル・マン)たるロシア人としてばかりでなく，ヨーロッパにとっての無用者（＝革命家）としてのメーチニコフの眼が明治維新を世界史のなかに公平に位置づけることを可能にしたのである。

だが「ラジカルな革命」というだけでは，いまだ直感的印象の域を出ない。メーチニコフの日本論の卓抜さはそれを日本文明の持つ歴史的必然性と捉えていくところにある。当時のヨーロッパの日本学にはこうした把握がまったく欠落していた。「彼らは自分たちの，既製の型紙に合わせて，日本の維新をおし測っている」[67]実にこうした歴史観への批判はメーチニコフがすでにロシア史について行ってきたところのものだ。だが日本史については，もう一つ別の事情がつけ加わる。それはヨーロッパの東洋学が，中国をもってアジアを代表させていることである。従来の日本論は「中国というプリズムをとおして日本を眺めすぎている」，つまり日本への内在的理解が欠けているのだとメーチニコフは考える。そしてこの内在的理解を可能にするものこそ，前章までで述べてきた"ナショナルな契機"というメーチニコフの基本的視座であった。そう考えれば，メーチニコフの日本論はロシ

66）拙訳，前掲書，16ページ。
67）前掲書，114ページ。

アについてみせたこの基本的視座のアジア，とりわけ日本への適用の試みだったと位置づけることもできるのである。

「日本における異国文明の摂取とは，政府のたんなるお遊びではなく民族(ナーツイヤ)全体の切迫した死活の要求であり，程度の差はあれ，すべての階層に固有の自覚的なものであった。……たまたま，それもまずきまって狭い利己的な目的をもって，日本にやって来たさまざまな国の〝文明普及者〟たちは，至極当然にもこう思いがちであった。日本は彼らのために，彼らのおかげで生きているにすぎない，と。

彼らが出現する以前の日本には，光りのない闇の時代が支配しており，現在もなお“日出ずる国の民”は，彼ら文明普及者の手で，当地に移植された新生活の諸要素とくらべて，あまりにも低い段階に立っているので，日本人にしてみれば，これらの要素を批判することなどまったく思いもよらず，要するにキリスト教文明全体を，分割あるいは分析不可能な，なにか全一的なものとして，そっくりそのまま受容するかさもなくば全否定するしかないと思いがちなのである」[68]

このようにメーチニコフはヨーロッパの“文明普及者”を弾劾する。そしてここで注目すべきは，彼が政府ないし国家と民族を明確に区別していることである。（すでに再三述べたようにメーチニコフの用語法では，民族(ナーツイヤ)は民衆(ナロード)と重なる。）大方のヨーロッパ人の眼からすると，国家の政策としてすべての外来のものを遮断してきたはずの日本が，維新を境に異常なまでに外来文明を摂取しだした真意が理解できない。だからそれを「猿真似」と捉えた。だがそうではないのだ，国家と民族（民衆）を混同してはならぬとメーチニコフは警告する。鎖国とはあくまでも国家の政策であり，排外的な民族性からくるものではない。こうした認識に立って，メーチニコフは江戸時代の民衆レベルでの外来文明の積極的摂取の実例を示していく。

また明治維新の歴史的前提として，徳川幕藩体制が揺らぎはじめる天保年間の社会情勢，とりわけ大塩平八郎にひきいられる被差別部落民の反乱に注目するあたりはメーチニコフの革命家としての炯眼というべきだろう。『日本帝国』のなかで彼はこう書く。「大坂で大塩平八郎によって起された反乱は本質的に民主的な性格を持っていた。それはじきに血の海に沈んでしまったが，煽動そのものは非常に多くの地方で長く残ることになる。信濃，近江，甲斐の民衆は権力の手先に抵抗し，必要とあらばサムライを虐殺することをも辞さなかった……日本のパーリア，朝鮮人捕虜の末裔ともいわれる穢多(エタ)自身が，人権と平等原理のために精力的なアッピールを展開した。日本は大きな変化の前夜にあった」[69]と。

おそらく大塩の乱についてのこうした言及は，当時の欧米文献でははじめてのものだろう。ちなみにわが国で大塩の乱の民主的性格が評価されだすのは明治10年代の自由民権期である。私はメーチニコフのこうした炯眼の背後に，当時の東京外国語学校長，中江篤介（兆民）の影を見るのだが，今はそれを証すべき資料がない。それはさておき，この文章の用語法のなかにも，左派バクーニン主義者といわれるメーチニコフの思想が色濃く反映しているではないか。

68）前掲書，111ページ。
69）Léon Metchnikoff. *L'empire japonais*, Genève, 1881, p641.

明治維新の外圧説，内発説については議論の分れるところだが，メーチニコフは明らかに後者に立つ。「《永遠の至福》（嘉永）時代の第六年に，日本に出現したアメリカ人とロシア人は，そんなこととはつゆ知らずに，この国の国家制度の全般的崩壊過程に行きあわせたことになる。国内のすべての要素がまったくの発酵状態にあり，ただ綱領あるいはなんらかの行動の一致がなかったために，運動への最後のひと突きが加えられなかっただけのことだ」[69]。この「最後のひと突き」を与えたのが黒船の出現だとメーチニコフはみるのである。

維新の歴史的必然性をこう捉えたうえで，メーチニコフはその根本動因をさぐるべく，日本史をさかのぼって検証していき，そこから日本文明の特質として，海洋民族特有の進取の気性とヨーロッパにも例をみない身分的平等観念，それに無神論的傾向を読み取った。そしてこうした特質が，四囲を海にかこまれ，外敵が侵入しにくい日本の地理的条件に規定されているのではないかと考えていく。「このように自然によって国の保全がまもられているところに，強大な中央権力が発生する基盤のないことは明白であり，現にこの国では非常に早い歴史的時期，すなわち紀元四世紀頃にはすでに貴族が，イギリスならさしずめ悪名高いジョン王時代の貴族ほどの特権的地位につくことになる」[70]

「明治維新論」では，これ以外にも二カ所でイギリスと日本のアナロジーを指摘しているが，それはなにもヨーロッパ的教養を持つロシアの読者（ちなみにこの論文は，ナロードニキ系の雑誌『ヂェーロ』に発表された）を相手にしているからではなく，この時彼の脳裡にはのちに梅棹忠夫によって提唱される文明の平行現象としての生態史観に酷似した思想が萌していたからなのだ。その一端を展開したのが，死の床で書きつがれた『文明と歴史的大河』である。

以上のことでメーチニコフが主張したかったのは，アジア的専制という欧米人の先入主をもって日本を眺めてはならぬということ，たとえ維新以前の日本が外見的には専制的政体を保持していたにしろその内部に進行する「動態的要素」すなわち“ナショナルな原理”の発展に注目せねばならぬということである。幕末から維新にかけての具体的分析については拙訳を参照してもらうことにし，つぎに征韓論，征台の役を契機とする維新の変質過程（メーチニコフの滞日期間はこれに重なる）が彼の眼にどう映ったかという問題を考えてみよう。なぜならそこにこそナロードニキたるメーチニコフの真骨頂があるのだから。

「ヨーロッパに範をとった日本の全国家制度の改造……手軽かにいえば，この十年間に日本が，異常な速度でなしとげたあらゆる無数の改正，改革も，それ自体はたいして意味がない。

つまりこの国の世論が，改革運動に実際いかなる態度をとっており，いかに改革運動をわがものにすることができるかを知らないかぎり，意味がない」[71]

メーチニコフは江戸時代における内的発展を支えたものとして世論による権力のチェック機能を指摘した。「日本ではその専制的外見で，度肝を抜くような法規や措置も，本質的

69）拙訳，前掲書，43-44ページ。
70）前掲書，95-96ページ。
71）前掲書，103ページ。

には，古き良き時代に中国人が敵を脅かすために楯に描いたというあの竜にすぎなかった。たとえば日本の法律では，家長は召使いの生殺与奪権を認められていたが，この権利を行使しようと思う者があろうものなら，世論はその人間に拭いがたい汚名をきせたのである」[72]メーチニコフの分析によれば維新の変質過程とは，こうした世論のチェック機能を封じこめる過程であり，それは内に対しては中央集権的官僚機構の創出過程となり，対外的には欧米コンプレックスの裏返しとしてのアジアへの優越意識から，侵略政策となって顕現する。しかもこの侵略政策(具体的には征台の役)が大久保利通の抬頭をうながし，中央集権化に拍車をかけてしまったことにメーチニコフは日本の将来的危機を予見する。彼の眼には大久保派の政策はこう映る。「今後政府がイニシアチブを発揮していくうえで鞏固な支柱となるべき，すべての階層の出身者からなる軍隊の創設と，同時にあらゆる地方の思惑とは切れたところで，唯一，中央権力にのみしたがう行政網を全国に張りめぐらすこと」[73]と。こうした“権力の原理”による“ナショナルな原理”の圧殺は，アナーキストのメーチニコフには坐視し得ぬものだったろう。だからこそそうした政策への巻き返しとして，彼は士族反乱，農民の不満，学生紛争，明六(めいろく)社の啓蒙活動，同郷意識にもとづく地域パトリオチズムに言及し，それらを総合するものとして大阪会議に端を発する自由民権運動の兆しを鋭敏に感じとったのである。

ではメーチニコフは，日本への“ヴ・ナロード”からなにを得たであろうか？第一に日本がアジアにあってアジアでないという感慨だろう。少なくとも欧米人が思い描くアジア像とは大きく違っていた。そこから彼はアジア観そのものを，より個別的に再検討していく(特にアジア的専制の解明)必要性を痛感したにちがいない。また第二に日本は以前から彼のなかに問題意識としてあった民俗学の重要性を再認識させ，そのための最初のフィールド・ワークの場を提供したはずである。『日本帝国』第二部《民衆篇》を埋める膨大な民俗学的記述はそれを物語っている。文字どおり彼は芝居小屋へ通い，辻占いに易学の初歩をならい，逢う人ごとに民話や俗信を教えてくれるよう依頼したようだ。にもかかわらず明治初年の日本の知的風土が，民俗資料の収集につとめるメーチニコフには障壁になったのである。「残念ながら，日本の鬼神論(デモノロギー)にかんするわれわれの概要は，きわめて不十分なものとなろう。なぜなら異国の観察者が交わり得る唯一の人間ともいうべき教養階級が，民衆の無知の創造物にたいし，きわめて軽蔑的な態度をとっているからである。彼らは民俗学的重要性など思いもかけないのである」[74]日本人の進取の気性と表裏一体をなすこうした過去への無関心な態度は，彼らの宗教的無関心と相俟って将来日本を危険な方向にむかわせるのではないかとも予言する。それは国内的には権力と民衆の乖離を深め，プロレタリアートの窮民化を来たし，対外的には残るアジア諸国への侵略として作用するだろうとすら洞察する。だが日本はこの《進歩》のレールから脱することはもはやできない。なぜならそれが歴史の必然性というものなのだから。「政治的予言者ならずとも，自信をもって明言できる。日本はこの進歩の道から後戻りすることは，もはや有機的に不可能であると。この道は険しい。しかも一方に列強の偽善的政策があり，他方，国内にも支配者集団

72) 前掲書，101-102ページ。
73) 前掲書，129ページ。
74) Léon Metchnikoff. *ibid.* p. 233.

の権勢欲があるために，日本的発展の事業は，いくつもの激動と地震（それもおそらく非常に震度の強い）なしには，その後の前進運動が望めないような軌道の上に立たされてしまっている」[75]とメーチニコフは書く。はたしてこの激動はもうすぎ去ったのか，それともこれからやって来るのか？太平洋戦争はその一つであったろう。だが「いくつもの」とメーチニコフが言っていることをわれわれは忘れてはならないだろう。

メーチニコフらナロードニキは，ロシアの資本主義化の門口にあって，それがはたして進歩かと執拗に問うた。であれば彼らにとって日本の近代化はナショナルな覚醒という意味ではある種の羨望をおぼえさせたが，他方でそれは危険な選択であったとの思いも残ったであろう。

5. その後の展開—むすびにかえて—

1875年暮，貧血症のため文部省との契約を果せぬままやむなく帰国の途についたメーチニコフは，1883年以来残された生涯をスイスのヌーシャテル・アカデミーの比較地理学，統計学の教授として送ることになる[76]。といっても象牙の塔にこもったわけではない。以前同様，ロシアからの亡命者たちとの親交はつづいていた。彼が交わった人物としては，スチェプニャーク・クラフチンスキイ，プレハーノフ，クロポトチン，チホミーロフといった錚々たるナロードニキの名が浮かぶ。またロシア国内の革命誌『事業（デエーロ）』にも頻繁に原稿を送りつづけた。だがなんといってもメーチニコフの学問的業績を考えるうえで重要なのは，パリ・コンミューンの参加者として当時ジュネーブに亡命していたフランスのアナーキスト，エリゼ・ルクリュとの出逢いであったろう。当時『地人論』なる膨大な地理学書を執筆していたルクリュはメーチニコフを助手にし，彼に極東の部の執筆を依頼したのである。そしてこの仕事をつづけるなかで，メーチニコフ自身のうちにも人類の文明史を綜合的に把握するような著作の構想が熟していったと思われる。1888年ジュネーブ近郊の小村クラランで50年の波乱にみちた生涯を閉じたメーチニコフは，未完の大著『文明と歴史的大河』を遺言としてルクリュに託した。

「進歩とは何か？」と題されたこの本の第一章の冒頭に書きつけられたつぎの言葉は，すでに死を意識した人間の内的衝迫をあますところなく伝えている。「進歩のイデーを喪失した人類史は，無意味な諸条件の交替であり，普遍的世界観の枠内におさまることのない偶発的諸現象の永遠の干満にすぎない。

いつの時代，どの民族，いずれの社会をとっても，狂気，偽善，犯罪がやりきれない単調さでくりかえされる。……

子孫の尊敬—歴史の殉教者にたいするこの遅すぎた報償—は量的にみて，かつてなしとげられた偉業の真の大きさに正比例したためしがない。人々の記憶に残るのは眩しく輝く

75）拙訳，前掲書，151-152ページ。

76）学者としてのメーチニコフは，ポリネシア，オセアニア研究を手がける。またメーチニコフの講義について同アカデミー教授のクナップはつぎのように書く。「メーチニコフの講義は地理学研究への多大な関心をかきたてた。彼の講義を受けた者は，愛する教授との活気あふれる興味ぶかい授業を感謝の念とともに思い出す。彼の学問的情熱はきわめて感化力に富むものだった」と。*Bulletin de la Société Neuchateloise de Geographie*, No. 4, Neuchatel, 1889.

ものだけであり，人類の真の善行は陽の目をみることもない。……歴史のパンテオンは無頼の徒，ペテン師，刑吏ばかりが住まうところなのだ。……

多くの学者は地球上の全住民を，歴史的ないし文化的民族のグループと未開民族—《原始人》あるいは野蛮人のグループとに分類する。しかしながらいろいろな民族とその習俗をより丹念に調べてみると，そうした分類がはなはだ不明確な定義に安住しており，そのためにきわめて粗雑な誤まりが生じ得ることを認めないわけにはいかない。

古今の旅行家たちの手で記述されたもっとも不幸で未開な民族ですら，なにがしかの道具を所有し，火の使用も知り，みずからの偶像（フェティシュ）を持ち，いかに幼稚とはいえなんらかの政治制度，家族制度にしたがっており，さらに原始的ながらも有節音をそなえた言語をちゃんと持っている。これらすべてのささやかな文化的《財産》は，多くの世代にわたる遺産であり，それは取得された富（ブラーゴ）の集積である。こうした富を所有する民族は，書かれざるものにせよすでに自分自身の歴史というものを持っており，それゆえみずからを文明民族の家族の一員に組み入れる資格を有するのである。

だが一方で文明とは，いかにその水準が低かろうと，無差別にすべての初歩的社会グループ（それはわれわれ自身の偉大さの高みから野蛮として見下されるのだが）を包みこむものであるのに対し，他方でわれわれはこうした野蛮性を身近にいたるところで目にするのである。文化的発達においてどんなに高度であろうと，野蛮性，未開性のすべての残滓から完全に自由であるような人間社会など一つもないのだ。もっとも低い発達水準にある未開人と，もっとも高度の文明人とのあいだには，長い不断の連関がある。この連鎖の両極ないし互いに非常に隔った環を比較せねばならぬとき，観察者は両者の巨大な差異に目を奪われるあまり，自然界における発達とはけっして直線的に進むものではないと熟知しているにもかかわらず，これら両極をなす環が，いつのまにかまったく自足的な集団として取り出されることになる。……

両極端をなす環，形態，差異から，結節環をなす中間項に移ると，困難はさらに増し，観察するわれわれはますます偶然性にふりまわされ，われわれの主観的な共感や傾向の影響を蒙むり，結局はわれわれの評価を根拠のない，矛盾した恣意的なものにしてしまうのである。

実際，特定の社会制度を研究するにあたって，何が文明の本質部分であり，何が原始的野蛮の遺産であるかを，いかにして区別できるのか？

だがまずは，文明とはそも何か，この言葉のもとに何を理解すべきかを確定しよう。……歴史という《十字架》の道全体をつうじて人類によってなされた進歩を考察するとき，進歩の存在を証明する唯一の事実，すなわち技術革新を指摘できる。実際，現代の技術と産業の発展を，先行する時代の技術，産業と比較するとき，われわれは人間の能力の巨大な成長，自然の力，時間と空間—この二つの宇宙大での人間の敵—に対する人間の支配の巨大な伸展を認めねばなるまい。

しかしである。技術的進歩が全般的進歩の主たる構成要素であるという事実が，どれほど明白であれ，全般的進歩の概念はけっして技術進歩だけで汲みつくされるものではない。苦悩し思惟する生身（リーチノスチ）の個人にとって，彼の墓の上に建てられる墓碑が美しいか否か，ある

いは自分を殺害した武器が優秀か，否か，といったことが何の関係があるというのか！…[77]」（傍線-筆者）

まだまだ引用したいが紙幅が許さない。それにしても20世紀末に生きるわれわれが今まさに直面している深刻な問題を先取りする言葉ではないか？こうした問題意識から発してメーチニコフは，歴史的進歩の指標として，人間相互の連帯を措定し，それを規定するものとして綜合的自然要因たる水利体系に注目していく。その展開を図式的に表現すれば，河川段階（強制的連合にもとづく専制国家），内海段階（半強制的連合にもとづく封建国家），最後に海洋段階（自発的連合にもとづく自由，平等，友愛のアナーキイな社会）となる[78]。ソビエトの研究者のなかには，こうしたメーチニコフの歴史観をさして，生産力視点，階級闘争視点が欠如していると批判するものがある[79]。だが私に言わせれば，そうした批判は不毛である。それよりもメーチニコフが人間をたんなる経済人としてではなく，自然内存在として捉え，その相互関係の発展をできるかぎり客観的に説きあかそうとしたことの先駆性，独創性を高く評価したい。そしてこうした彼の独創的な理論はアジアを凝視する（『文明と歴史的大河』における古代インド文明，とりわけ中国文明の分析に顕著）ことによってはじめて獲得されたものであり，そのきっかけを与えたのが短期間にせよ，日本へのヴ・ナロード体験だったことはもはや説明する必要もないだろう。メーチニコフはアジアを媒介としてヨーロッパ文明を相対化し得る視座を獲得したというべきだろう。

（1983年6月）

О национальном моменте в революционной мысли Л. И. Мечникова.

Масадзи Ватанабэ

1.

В предлагаемой статье автор прослеживает процесс формирования революционной мысли Льва Ильича Мечникова, обращая специальное внимание на теоретическое углубление им значений национального момента в истории революционного движения. Л. И. Мечникова можно назвать еще малоисследованным мыслителем, несмотря на то, что сам его жизненный путь представляет большой интерес для тех, которые исследуют историю русской общественной мысли во второй половине 19 века. Такая малоисследованность, по мнению автора, объясняется следующими факторами: 1. слишком долгая эмигрантская жизнь, 2. анонимность многих его работ

77) Л. И. Мечников. 《Цивилизация и великие исторические реки》, М., 1924, стр. 39-42.

78) 拙稿，「ナロードニキと日本(2)—メーチニコフの東洋文明観における日本の位置—」，『ロシヤ語ロシヤ文学研究』，第12号，1980. を参照のこと。

79) И. Г. Лиоренцевич. „Л. И. Мечников", в книге 《Социологическая мысль в России》, Л., 1978, стр. 94-96.

(у него насчитываются около 400 статей, написанных не только в русских, но и зарубежных журналах на разных языках под десятком псевдонимов.) 3. чрезвычайно широкий диапазон тем и жанров его произведений. 4. односторонний подход к истории народничества в советской историографии, где освещают идеологов по преимуществу. Но нельзя забывать, что народничество является не систематической идеологией, а общим настроением интеллигенции того времени.

2.

К концу 60-х годов среди передовых интеллигентов России снова появлялось своего рода умственное возвращение к народу. И такая атмосфера отражается и в серийных статьях Мечникова "Противники государства на Руси", помещенных в "Колоколе" французского издания в 1868 г. В этих статьях Мечников подчеркивает важность "национального начала" в освободительном движении, ракрывая такую традицию в русской старине. Под одоблением Герцена и Огарева Мечников переоценивает исторические значения казаков, лжедмирия в смутное время и религиозных расколов, опираясь на книги Костмарова, Щапова и только что опубликованные архивные данные. По мнению Мечникова, народ без всякой политической закваски считается уже ностальгической утопией, так что он употребляет слово "нация" вместо народа с оговоркой. Нельзя отождествлять национальное начало с национализмом в узком смысле слова. Дело в том, что революционерам не следует игнорировать национальное начало. Исходя из такого начала или углубляясь в такое начало, сама революционная мысль получит гораздо большую возможность. С такой точки зрения Мечников перетолковал русскую историю на примере казаков.

3.

И этот Мечников имеет тесную связь с Японией. Он встретился в Женеве с одним японцем, будущим адмиралом японской армии Ивао Ояма и по рекомендации его он стал учителем Токийской школы иностранных языков. Его поездка в Японию и двухлетнее пребывание там в середине 70-х годов автор охарактеризовал как "хождение в народ" для него. Кроме преподавательской работы, Мечников, как востоковед и этнограф, собирал много материалов по Японии и проницательным взором анализировал текущее положение Японии после переворота "Мэйдзи". Плодами этих тщательных работ является около дватцати монографий, в том числе и большая книга "Японская империя". И в таких работах мы ярко видим его основной подход к истории, вышеуказанный касательно истории России, т. е. Мечников четко уловил "национальное начало", "динамический элемент в истории" под покровом деспотизма до Мэйдзи эры.

После возвращения в Европу он стал профессором Невшательской академии и все таки связываясь с русскими революционными эмигрантами, расширял свой научный кругозор на Азию вообще, на Китай в часности. В недоконченной книге

“Цивилизация и великие исторические реки” он с пафосом обнаруживал относительность нынешней европейской цивилизации и привлекал внимание европейских читателей к Востоку. Именно эта оригинальная точка зрения на всемирную историю приобретена Мечниковым вследствие углубления в национальное начало и опыта пребывания в Японии.